# 平城宮発掘調査報告 Ⅸ

## 宮城門・大垣の調査

## 第Ⅰ章　序　　言

この報告は，奈良市佐紀町にある特別史跡「平城宮跡」のうち，南・北・西辺地域で実施した，1963（昭和38）年度の第14次調査，第15次調査，1964（昭和39）年度の第16次調査，第17次調査，第18次調査，第23次調査，1965（昭和40）年度の第25次調査の成果を中心としてとりまとめたものである。ここでとりあげた調査地域は，南面中央門（朱雀門），西面南門（玉手門），西面中央門（佐伯門）の3宮城門地域と，宮の西南隅地域，玉手門・佐伯門間の中間地域，北面中央部での大垣地域である。その他，平城宮域内で実施した宮城大垣に係る発掘調査のうち，宮域西南部での小規模な5回の調査，1965（昭和40）年度の第25―2次調査，1966（昭和41）年度の第34次調査，1969（昭和44）年度の第52―2次調査，第58次調査，1970（昭和45）年度の第62次調査の結果もあわせ付記した。

さて，このような宮の四至を明らかにすることを目的とした調査は，1962年におこった宮域西南部の開発問題が契機となったものである。これを契機として平城宮跡は1963年に特別史跡の指定範囲が方 1km の宮跡全域に拡大され，同時に宮域保存のために土地買収・国有地化がなされることになった[1]。調査組織も1963年度には平城宮跡発掘調査部が発足した。今回報告の調査は，この新たな機構で実施した調査である[2]。

平城宮の調査事業の進展については，今回報告する地域の調査時点を含めて，すでに公刊した報告書で記述したとおりである[3]。その後の概況をここで略述しておく。平城宮内の調査は，1976年度から第1次朝堂院推定地域と東院地域で重点的に行なっている。第1次朝堂院推定地域の東北部においては，地上にその痕跡をとどめる東第1堂及び東第2堂推定土壇を中心に調査を行ない（第97[4]・102次[5]），礎石建ちの南北棟建物を2棟検出している。これら2棟は約15mの間隔をおいて建てられており，第1堂は桁行10間，梁行4間の規模であることを確認した。

---

註

1）平城宮跡の全面保存に至る経過に関しては，奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅳ』官衙地域の調査2奈良国立文化財研究所学報第17冊1966年 p.1～3（以下，『平城宮報告』『平城宮報告Ⅳ』等と略称する）。坪井清足「平城宮発掘調査10年の進展」『奈良国立文化財研究所年報1968』p.2～6（以下『年報』1968年等と略称する）。『奈良国立文化財研究所二十年史』1972 p.40・41等に述べられているので，これらを参照されたい。

2）今回報告する各調査地の概要については，第14・15次は『年報』1964年で，第16・17・18・23次は『年報』1965年で，第25・第25―2次は『年報』1966年で，第34次は『年報』1967年で報告している。

3）『平城宮報告Ⅶ』1976年 p.1～7。

4）『年報』1977年 p.22～24。

5）『年報』1978年 p.19～21。

この地域においてはすでに1967年から数次にわたって調査を実施し（第27・41・75・77次調査），第１次朝堂院推定地の規模やこれと北域遺構との関連についての知見を一部得ている[6]。

一方，東院地域[7]においては1968年に実施した第44次調査で検出した園池のほぼ全貌を明らかにする調査を1976年に行ない（第99次），複雑に屈曲する汀線をもつ南北約60mの逆L字形の池であることを確認した[8]。また，この池が外形をくずさず，前後２時期に分れることが，明らかになった。宮内における園池の調査としては，1977年に行なった宮の北辺西部の佐紀池の調査（第101次）がある。この調査は幼稚園建設に伴う事前調査であるが，明治年間に開さくされた溜池と考えられていたこの池底において，奈良時代の汀線を検出し，現在の佐紀池とほぼ同じ汀線をもつ池を推定し得た[9]。

平城京内の大規模開発工事が増大するにともなって，発掘調査を要する機会も増えてきた。京内の調査は，従来ほとんど薬師寺・大安寺・西大寺等，寺院の調査に限られていたが，条坊内居住地域の調査をも行なうようになった。今回報告の第25―２次調査も，簡易保険奈良保養センター建設にともなう事前調査であり，この先蹤ともいうべきものであった。その後，大規模に実施した発掘調査の多くは，奈良市域の西への膨脹にともなう事前調査であったため，それらの成果については逐次概略を報告している[10]。右京地域の発掘調査は近鉄西大寺駅界わいの開発に伴なう調査が中心で，なかでもショッピングセンター・銀行建設に伴なう事前調査でまぼろしの寺といわれた西隆寺の金堂，塔，東門等の伽藍遺構が明らかになり，大きな成果をあげた[11]。また，1976（昭和51）年度に右京地区でははじめて庶民の居住地域として右京五条四坊三坪（奈良市立西京中学校建設予定地）において発掘調査を実施した。発掘地が丘陵地帯であるため，削平が著しく，検出遺構はさほど稠密ではなかったが，条坊・宅地割の新たな資料を得ることができた。さらに蔵骨器に墨・筆・銭を副葬した火葬墓かと思われる遺構を検出したことによって，律令体制下における喪葬令との関わりに新たな問題点を提起した[12]。

検出遺構や出土遺物の永久的な保存については，発掘の当初から大きな課題であった。平城宮の発掘調査が大規模化し，恒常化するに伴って，ますますそうした要請は強くなった。

保存処理を要する資料は多方面にわたるため，各種の機械設備を順次整え，その処理にあたっている。現在，埋蔵文化財センター遺物処理研究室との連携によって木製品のP・E・G含浸処理，木簡の真空凍結乾燥，金属遺物の保存処理等をはじめ，皇朝十二銭のX線分析，緑釉陶釉薬の化学分析等各種材質の分析，さらには保存のための修復を行なっている。

今回報告する調査は1963年度から1969年度にわたるが，中心部は1963～1965年度である。

今回報告の発掘調査は，1963年度から1969年度にまでおよんだため，調査関係者の出入がか

---

6）『年報』1966年p.34～36，『年報』1968年 p.37・38，『年報』1973年p.19～25。

7）この調査は，第29・39次の調査で宮の東面南門（的門）が東一坊大路に南面して建つことが明らかになったため（『年報』1967年pp.35）に，宮の東張出部分の東南隅を検出することを目的として行なったものである。『年報』1968年p.38。

5）『年報1966』p.34～36，『年報1968』p.37・38，『年報1973』p.19～25。

8）『年報1977』p.24～28。

9）『年報1977』p.28～30。

10）『平城宮報告Ⅶ』1974年，奈良国立文化財研究所『平城宮左京三条二坊』奈良国立文化財研究所学報第25冊1975年，奈良県・奈良国立文化財研究所『平城京左京八条三坊発掘調査概報』1976年，奈良国立文化財研究所『平城京左京三条二坊六坪発掘調査概報』1976年等。

11）西隆寺調査委員会『西隆寺発掘調査報告書』1976年。

12）奈良国立文化財研究所『平城京右京五条四坊三坪発掘調査概報』1977年。

なりはげしかった。1964年度の発掘調査関係者は次のとおりである。

調査責任者

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 調査責任者 | 奈良国立文化財研究所長　小林　剛 | | | |
| | 平城宮跡発掘調査部長　榧本亀治郎 | | | |
| 第一調査室 | 坪井　清足 | 本村　豪章 | 鈴木　充 | 藤井　功 |
| | 森　郁夫 | 石井　則孝 | 荒木　伸介 | 佐藤　興治 |
| 第二調査室 | 工藤　圭章 | 岡田　茂弘 | 牛川　喜幸 | 八賀　晋 |
| | 三輪　嘉六 | 猪熊　兼勝 | 鬼頭　清明 | 高島　忠平 |
| 第三調査室 | 沢村　仁 | 河原　純之 | 工楽　善通 | 町田　章 |
| | 横田　拓実 | 松下　正司 | 栗原　和彦 | |
| 保存整理室 | 横山　浩一 | 田中　琢 | 佐原　真 | 横田　義章 |
| | 八幡　扶桑 | 佃　幹雄 | | |
| 史料調査室 | 田中　稔 | 狩野　久 | 伊東　太作 | |

本報告書の作製にあたっては，上記関係者に加えて多数の調査員が参加した。主として，遺構については，亀井伸雄・清水真一・中村雅治・藤原武二・藤村泉・細見啓三・宮沢智士・宮本長二郎・村上訒一，遺物については，秋山隆保・阿部義平・綾村宏・石松好雄・今泉隆雄・稲田孝司・小笠原好彦・岡本東三・甲斐忠彦・加藤優・黒崎直・沢田正昭・田辺征夫・東野治之・西弘海・西谷正・山沢義貴・山中敏史・吉田恵二が整理・作成に参加し，調査研究の進行にともなって数回の討議を経て，原稿を作成した。執筆分担はつぎのとおりである。

第Ⅰ章狩野久，第Ⅱ章森郁夫，第Ⅲ章1森郁夫，2伊東太作，第Ⅳ章1横田拓実，2森郁夫，3稲田孝司，4佐藤興治，第Ⅴ章1A～C森郁夫，1D伊東太作，2A森郁夫，2B稲田孝司，沢田正昭，3横田拓実，鬼頭清明，4狩野久，第Ⅵ章細見啓三，

英文要訳は，合衆国ハーバード大学 William Carter 氏をわずらわした。写真撮影は佃幹雄，印刷用複製は佃幹雄・渡辺衆芳が担当し，藤村礼子・池田千賀枝が助力した。編集は，坪井清足・鈴木嘉吉・狩野久の指導のもとにすすめ，沢村仁が着手し，森郁夫がこれをうけつぎ，石川千恵子の助力を得て完成した。